

京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十七卷 第二・三號

ヨークシャー・ラツダイトに就いて(一)……………穗積文雄

絶對主義論の悲劇……………堀江英一

『自然の法典』……………田中眞晴

「混合經濟」の構造と計畫化の方途……………馬場正雄

昭和二十六年三月

絶對主義論の悲劇

——「均衡理論」の批判——

堀 江 英 一

わたしはかつて『本源の蓄積における國家權力の問題』（季刊社會科學第一集、昭和二十三年）を書いて、〔一〕絶對主義の發展段階的基礎としてマニユファクチュア時代を必要としないこと。〔二〕絶對主義は本源の蓄積を完遂し得ないこと、を指摘したが、その後わたしは『封建社會における資本の存在形態』（社會構成史體系第三回）および『日本のマニユファクチュア問題』においてこの二點を發展させて、〔一〕絶對主義はマニユファクチュア段階に先行する小營業段階に成立したと、〔二〕絶對主義の行う本源の蓄積はブルジュアジー、従つてブルジュア政權の行う本源の蓄積と類型を異にすること、を論證した。

然しその場合、わたしは絶對主義が純粹封建體制におけるいかなる矛盾—階級關係から必然化してくるか、従つて絶對主義がいかなる階級的基礎に立つか、の最も基本的問題を決定的に解決し得なかつたし、そこから當然いまままで支配的學說であつた「均衡理論」を充分批判することができなかつた。それは近稿『方法の問題—絶對主義について』（歴史學研究一四八號）においても同様であつて、そこで展開した「均衡理論」批判も充分成巧して

すると云うわけにはいかなう。

さきにわたしが展開した二つの論點についてはいろいろ批判も多いが、いまだそれが覆つたとは思われない。そこで、わたしはこの二論點を前提としつつ、「均衡理論」を批判し絶對主義の階級的基礎を積極的に規定することとしよう

一 「正統えの模索」Ⅱ「均衡理論」の純化

わたしの尊敬する先學白杉庄一郎氏は『絶對主義論批判』なる一書を公刊して、「講座派的な絶對主義Ⅱ封建國家説の立場に立ち、一部の論者はさらに徹底してこれを絶對主義Ⅱ封建反動説にまで極端化しさえしてきた」
「戦後この國の論壇をにぎわしてきた絶對主義論の多く」を文字通り系統的に批判して、「正統えの模索」をくわだてている。そこで、氏の模索しつゝある「正統」とは、カウツキーがはじめ、わが國に支配的に行われてきた「均衡理論」の論理的純化である。

白杉氏の「正統」絶對主義論は労働派の戦後派論客大島清氏と同じ論理的構造のうえにきずかれていること、白杉氏が認められる通りである（前掲書第四章第一節）。白杉氏とその先師大島氏の論理的構造は、單純化してしまえば、次のような三段論法につきるであらう——
〔一〕絶對主義は封建社會から資本制社會への過渡期の權力形態である、〔二〕ところで、この過渡期においては封建的生産様式と資本制生産様式とが並存し、従つて封建貴族とブルジュアジーとの勢力が均衡しながらたかたかつている、〔三〕だから、絶對主義權力は封建貴族とブルジュアジーとを同時に代表し、半分封建的・半分ブルジュア的な過渡的な折衷的な權力形態であり、従つて絶對主義成立はな

しくずしの部分的ブルジュア革命である。ここでは、そのときどきの經濟構造とそのときどきの階級關係がそのまま權力形態に反映され中和されるものと考えられている。だから白杉氏はブルジュア共和制が同時に人民共和制であるとの論理を展開する——「共和制下においてのみブルジュアジーとプロレタリアートの鬭争が究極まで闘われうるのは、ブルジュアジーの直接支配の形態たる共和制が單にブルジュア的なものではなくて、同時に人民的な側面をもつからである」(前掲書三八—三九頁)。もしこの論理を一貫すれば、獨占ブルジュアジーの暴力的支配形態たるファッシズムさえ同時にプロレタリア的側面をもつこととなるであろう。白杉氏の絶對主義論はこうした社會黨的論理の絶對主義論えの適用であり、だからこそ氏は大島氏を先師として尊敬するのである。

ところで、この大島＝白杉氏流の自稱正統絶對主義論は勞農派のあの有名な明治維新＝「ブルジュアジー抜き」ブルジュア革命論の修正としてあらわれてきたのであり、その系統に屬するものである。勞農派の明治維新論の創設者猪俣津南雄氏は云う——明治維新はブルジュアジーでなく下級武士層によつて創建されて貴族・軍官僚・大地主の政治的勢力のうえに構築されているが、かかるブルジュアジーならざる封建的政治權力が徳川封建絶對主義を打倒し、封建絶對主義の基礎たる封建的土地制度およびそれに隨伴する諸特權を破壊して、つまり原始蓄積を完遂して、自らブルジュア政權に轉化する(『現代日本研究』一五七—一五八頁)。猪俣氏の見解は多少のニュアンスの相異はあれ大内兵衛・向坂逸郎・土屋喬雄・高橋正雄氏らの『日本資本主義の研究』のうちうけつがれているが、然しかかる「ブルジュアジー抜き」ブルジュア革命となる天下無類のブルジュア革命論は通用しそろにない。そこで、勞農派内部において故小野道雄氏(土屋・小野『近世日本農業經濟史論』二六七頁以下)とくに對馬忠行氏(『日本資本主義論争史論』六四—七一頁)がそれを明治維新＝絶對主義論えと修正する。對馬氏にあつては、

絶對主義を創建する明治變革の主體は下級武士層であるが、その下級武士層はすでに地主層（封建的土地所有の體から生じた過小農的土地所有）としての新地主的土地所有（半封建的土地所有）と三井を先頭とする前期的資本とを社會的支柱とする開明的封建家臣團であり、従つて開明的封建家臣團とそれが創建した明治絶對政權の性格はブルジュニアジーと半封建的地主とを併せ代表することとなる。とすれば、對馬氏が「絶對主義國家なるものは、封建的または半封建的土地所有者階級の權力であり、『大地主の王朝』である」（前掲書一三頁）と云う場合、それは明瞭にさきの歸結（均衡權力論と矛盾する。この論理的矛盾を回避して「均衡理論」を貫徹しようとするのが大島（白杉氏の絶對主義論である。だから、大島（白杉兩氏は勞農派絶對主義論の正嫡である。

猪俣式勞農派明治維新論の對極として出發した服部之總氏は、カウツキーの絶對主義論（フランス革命時代に於ける階級對立）の最初の紹介者の一人であり、その「均衡理論」を最初に明治維新に適用した人である（『マルキシズムに於る絶對主義の概念』—『絶對主義論』所收）。服部氏によれば、周知のように維新の志士をマニユファクチュア・ブルジュニアジーまたはその階級の代表者として取扱ひ、従つて「戊申戦争の官賊兩陣營は、外見上のあらゆる同似性にも拘らず、異つた階級的利害を主張したのである。一は國民的ブルジュニアジーの、他は封建諸侯の」（『維新史の方法論』三六頁）と述べ、討幕西南雄藩をマニユファクチュア・ブルジュニアジーの代表として規定している。だから、服部氏の明治絶對主義政權論は部分的にしる國民的ブルジュニアジーの政權参加を豫定しているのである（拙著『封建社會における資本の存在形態』第二章。拙著『日本のマニユファクチュア問題』。これに對して、服部氏と奈良本辰也氏がが反論してきた。服部氏の抗辯はこうである——「明治維新は絶對主義國家をうみ出しつくりあげてゆく過程と、その絶對主義を打倒し人民のための民主主義國家をつくりださずにはやまぬブルジュニア民主

義の過程との、同時的進行であり、二重過程である。だがこの二重の過程を一個の權力が同時に擔當することは不可能である。…明治政府は徹頭徹尾絶對主義權力であり、かかるものとしてブルジュア革命のいつさいの波にたいして必死に抵抗しつつ明治大政府を構築していつた」〔明治の革命〕はじがき二二三頁と。まさにその通り！だから、服部氏は明治維新政府を國民的ブルジュアジーの代表者などと云うべきでなかつた、とわたしは批判したのであり、だからまた服部氏の抗辯は凡そ的外れである。と云うより、服部氏はわざと的外れしているのだからうか？ 奈良本氏が「堀江氏のように二〇年も前の服部氏の言葉を——現在の服部氏を論ずるに少しも關係のない——何回となく引用して勝負をつけようとはやる人に對しては、このことは十分氣をつけておかなければならなかつたのであるが、残念ながら、服部氏もわたくしも堀江氏のような人が多數いるとは氣がつかなかつた」〔幕末・小營業段階説と私の立場〕—歴史學研究一四八號三七頁と云つたとしても、わたしはそれを奈良本氏のいつものあの大きな抹殺的空論として片付けてよかるう。何となれば、服部氏はいまま幕末維新の浪士・草莽がマニユファクチュア・ブルジュアジーの代表者であり維新政權の擔手であることを二十年まえより多く強調しているからである。然し奈良本氏が躍氣になるのも無理はない。奈良本氏の提唱になる郷士中農論は、中農ブルジュアジー（マニユファクチュア・ブルッシュュアジーと置いてもよかるう）を代表しその性格を併せそなえる郷士が討幕西南雄藩の藩權力をブルジュア化し、それが維新政權の主體となることを論證しようとするものであり〔近世封建社會史論〕、それは服部之總氏と同じ論理的構造のうえに立つている。ここまでは對馬氏と服部之奈良本氏は同じ「均衡理論」に立脚してをり、従つて服部之奈良本氏が絶對主義封建國家論をそこから歸結しようとしても、それは由に浮いた空論となり論理的矛盾に陥入らざるを得ない。勞農派に屬すると見られる白杉氏が

残念がるのも無理はない。かくして、勞農派の對極として出發した服部ハツシ奈良本氏の絶對主義論は、見かけは異つていても、勞農派と同じ「均衡理論」に立脚してをり、同じ論理的迷路にさまよい込んでゐる。

「均衡理論」の絶對主義論の論理的矛盾を最も赤裸々に暴露してゐるのは、勞農派と講座派とのいわば接點に立つてゐる正直な人河野健二氏である。講座派の服部氏の後繼奈良本氏は河野氏を自分の味方と見做してをり（前掲論文四〇頁）。「明治維新と絶對王政」一時論昭和二十四年六・七合併號、勞農派大島氏の後繼白杉氏は氏の云う「正統」絶對主義論の「探索」者として大島氏とならんで河野氏をあげてゐる。河野氏が服部ハツシ奈良本氏と大島オシマ白杉氏との双方から引張風であることは、服部ハツシ奈良本氏の絶對主義論が河野氏を中繼して大島オシマ白杉氏の絶對主義論に つながることを暗示してゐると云えないであらうか？（河野氏と大島氏との類似性については、拙稿『方法の問題』に詳しく取扱つてゐる。それはとにかくとして河野氏は云う——一方では「絶對王政の權力は、このような二つの、それ自體矛盾した性質を具えてゐる。（一つは）王權のブルジュニア的側面であり、（もう一つは）その封建的本質を示すものである」（「絶對主義の構造」九頁）が、他方では或は「（絶對主義は）政治權力が經濟的な階級によつて握られず、一應階級とは別個の存在が權力を掌握してゐることの現われである」（前掲書一頁）、或は「それでも矢張り絶對主義は封建國家なのだ」（前掲書七・二七頁）と。河野氏は一方では均衡論的な折衷國家論を展開しながら、他方では或は超階級國家論と封建國家論とを展開し、しかもこの三つの國家論をつなぐ環はただ「それでも矢張り」と云う押しの一手であるにすぎない。河野氏がアーでもないコーでもない」と迷路のうちに心配そうにさまよつてゐる姿が、われわれには手にとるやうにわかる。河野氏の無類の正直な人格が氏をこれほど苦しめてゐるのである。だが、罪は河野氏の正直さにあるのではなく、河野氏が「均衡理論」を採用しながら、封建國家説

を歸結しようとするところにあつたのである。

かくして、カウツキの「均衡理論」は、勞農派猪俣氏の明治維新論の勞農派的修正者對馬氏をもその講座派的批判者服部||奈良本氏をもとくべからざる迷路に追い込んだ。何とかしなければならぬ。大島||白杉氏は、あたかもアレキサンダー大王のように、「均衡理論」を徹底させ封建國家論を切つて棄てることによつて、いとも簡単にこの迷路から脱出したのである。さあロードス島だ、おどれおどれ！ だが、大島||白杉氏がおどり狂うロードス島は、マルクス||レーニン主義とは縁もゆかりもない階級調和——反動貴族と革命ブルジュアジーとが——いとも仲睦じく借老同穴している彼岸である。然しブルジュアジーとプロレタリアートとの借老同穴を希望する人々を、いまのわれわれはどう考えたらいいであろうか？

だが、封建的生産様式と資本制生産様式とが並存し、封建貴族とブルジュアジーとが勢力均衡するとは、資本制生産様式をはらむ封建社會とは、どんなものであろうか？ それは兩者が同一權力のうちに代表されるようなものであろうか？ それとも權力闘争を益々熾烈化するのであろうか？

二 封建社會から近代社會への推轉過程

絶對主義の「均衡理論」は、既に述べたように、封建的生産様式と資本制生産様式との並存——封建貴族とブルジュアジーとの均衡を前提し、そこから過渡的權力形態||半分封建的半分ブルジュア的な絶對主義を歸結しようとするものであり、従つてその絶對主義論はいわばなしくずしのブルジュア革命論となる。だが、かかる「均衡理論」は正しいであろうか？

下部構造たる經濟構造は上部構造としての權力形態を規定する——これは唯物史觀の基本的命題である。「均衡理論」はこの命題の忠實な適用であるように見えるが、實は素朴きわまる誤用である。「均衡理論」は、單純化して云えば、封建社會のうちに資本制生産様式が發展するに應じてそれだけ封建國家は近代化され、資本制生産様式が支配するに應じてブルジュア國家ができる、と理解する。だが、この命題は經濟構造が結局において權力形態を規定することを意味する。と云う意味は、封建社會の展開は、即ち封建社會における資本制生産様式の發展は、封建社會の矛盾——階級闘争を次第に激化し、封建國家の凝集化と反封建闘争——ブルジュア革命運動との對蹠性を益々激烈にし、最後に、凝集化された封建國家がブルジュア革命運動のまゝに崩れ去ることである。「均衡理論」は權力形態を矛盾——階級闘争の中和劑と考へるが、われわれは、そして唯物史觀はそれを階級闘争の檣舞臺と理解する。われわれは、ここで極く簡單にしかも單純化して、封建社會から近代社會への推轉過程における經濟と政治とくに權力との基本關係をあきらかにして、「均衡理論」に對する反證とすることとする。

封建的生產様式は、封建的大土地領有者——封建貴族が生産手段を占有する直接生産者たる封建農民を經濟外強制によつて地代を通じ搾取——支配する關係であり、従つて封建社會の基本的對立は封建貴族と封建農民との對立である。だが、封建的生產様式が發展するに従つて、この對立は様相を變化しつつ激化する。

封建的生產様式は、自然經濟を表現する勞働地代に立脚する古典的莊園體制——ヴィリカチオン體制から出發する。古典的莊園體制——ヴィリカチオン體制とは、周知のように、耕地を直管地と隸農地とに分割して、農民の必要生産物は農民が占有する隸農地で生産せしめ、農民の剩餘勞働は勞働地代の形態で直接莊園領主に收取されて領主の直管地に投下される體制であり、従つてそこでは莊園領主が農民——農奴から勞働地代を收取するための經

濟外強制は勞働する人間そのものの人的支配——「直接的強制」(資本論③三五頁)の形態をとり、それゆえにまた莊園領主は自己の農奴に對し私的地主としてでなく一つの君主として、「帝國のうちの帝國」としてのぞむこととなる。かくして、古典的莊園體制——ヴィリカチオン體制に照應する國家形態は分立する莊園領主の權力形態たる分權的封建國家である。ところで、生産力が發達して社會的分業に伴つて商品經濟が展開すれば、自然經濟に立脚していた古典的莊園體制——ヴィリカチオン體制は危機——所謂「封建的危機」に陥入らざるを得ないが、その危機は俗説が説く自然經濟と商品經濟とのあの矛盾でなくて、次のような階級的矛盾相刺である——勞働地代を強化しつづ(從つて領主——農奴の搾取關係を自然經濟におしとどめて)自ら市場生産に乗り出そうとする封建貴族——グーツヘルと勞働地代を廢棄して自らの占有地經營を強化して自ら商品生産者に轉化しようとする農奴との、所謂封建貴族の「封建反動」と農奴の「ブルジュア革命」との、階級的鬭争であり(ロスマンスキー——ポスタンの解釋。詳しくは大家久雄『近代資本主義の系譜』中の紹介參照)、「農民戰爭」はその激發形態である(ニンゲルスは農民戰爭をブルジュア革命と規定している——『ドイツ農民戰爭』)。「農民戰爭」で革命的農民が決定的に敗北したか農奴の革命化の條件がかけていた場合、「封建反動」が、グーツヘルシャフト——オスト・エルベ型土地所有形態がうまれる。

然し「農民戰爭」における「封建的危機」は、通常かかる形態では克服しうべくもなり、より前進的方向における「封建制の再編成」を必然化した。「封建制の再編成」過程は二つの方向から考察することができる。〔下部構造——地代形態の推轉。「農民戰爭」の通例的・一般的歸結は、イギリス・フランス・西ドイツに見られる勞働地代——ヴィリカチオン體制から生産物地代または貨幣地代——純粹封建體制への推轉であつた。「農民戰爭」へと激發したヴィリカチオン體制の矛盾は一應解決され、ヨリ高次の矛盾へと止揚された。そこでは、封建地代——

封建貴族と封建農民との搾取關係は廢棄されたわけではないが、農民はその全労働時間を自己の占有地經營に投下して、自ら市場生産に適應しうる條件、さらに云えば資本制的分化の起動力たる「胎芽的利潤」發生の條件を獲得し（資本論長谷部譯③三二二頁）、それに伴つて封建貴族は農業の「經營者」から牛産物地代または貨幣地代の^{レトリヤ}收得者となる。そればかりではない。ここでは、經濟外強制は労働する人間の「直接的強制」たることをやめて労働の結果たる生産物または貨幣を收取する保證——「法律的諸規定」——「關係の力」（前掲書三五五頁）に轉化し、従つて直接生産者と地代支拂義務者との分離を許容せざるを得なくする。純粹封建體制とは、封建農民が商品生産者化し資本制的分化をはじめる條件のきざす封建體制である。〔二〕上部構造Ⅱ封建權力の州邦的集中。一三八一年イギリスのワット・タイラーのひきいる農民は労働地代の貨幣地代への轉化とともに領主權力の據點——領主裁判權と教會制度との革命を要求して、専ら莊園領主を攻撃した（拙著『西洋經濟史』六八一—六九頁。「農民戰爭」によつて封建權力の再編成——封建權力の集中は不可避となつた。エンゲルスは大農民戰爭の諸結果を要約して云つてゐる——「貴族もまた相當な打撃をうけた。彼らの城はたいてい破壊された。あまたのもつとも由緒ある家門は没落し、わずかに諸侯につかえることによつて生きうるばかりになつた。農民にたいする彼らの無力は確證された。彼らは、いたるところでうちやぶられ、降服をしいられた。ただ諸侯の軍隊のみが彼らをすくつたのであつた。彼らは、……ますます諸侯の支配下におちこんでゆくほかなかつた」（『ドイツ農民戰爭』—マルクス・エンゲルス選集十六卷上—三六頁）。純粹封建體制に對應する權力形態は、「貴族叛亂」を壓えつつ進行する、封建貴族から諸侯への封建權力の「州邦的集中」（前掲書一三七頁）——經濟外強制の州邦國家權力への漸次的上昇である。

註一 「州邦的集中」が古典的形態をとつて固定化したのは、ドイツの州邦制と日本の幕藩體制であるが、他の諸國でもこの「州

邦的集中」は經過的にあらわれたと見る事ができる。イギリスのランカスターヨーク家時代はそれにあたるのでなからうか？
そうだとすればわが國における「近世封建社會」なる概念は世界的概念となる。

ところで、この「州邦的集中」には二つの形態が考えられる。第一形態——封建領主の獨立性と土着性とを否定して、彼等を封建諸侯の半官儀的家臣團たらしめ、従つて封建領主にかわつて封建諸侯が直接農民を搾取する場合。たとえば、徳川時代の祿米——扶持米取りが典型であり、總じて徳川幕藩體制はかかる官儀性が濃厚であつたと考えられる。第二形態——封建諸侯は、封建領主と隸農との間の純粹封建的搾取關係を維持せしめつつ、封建領主がもつ政治的獨立性を剝奪しこれを封建諸侯の手中に敗取する場合。西ヨーロッパに多く見られる形態である。

前者は政治的獨立性ととも經濟的獨立性を喪失しているが、後者は政治的獨立性を失いながらも經濟的獨立性をもち、經濟的進展にある程度反應することができた。

ところで、「農民戰爭」的矛盾のかかる解決——純粹封建體制と州邦國家とは新しい矛盾展開のための出發點にすぎなかつた。蓋し純粹封建體制は、既に述べた通りそれ自身の本質として、農民の商品生産者化と資本制的分化との條件と可能性とを事實上内包してをり、そこから第二の「封建的危機」に直面する必然性をはらんでゐたからである。純粹封建體制のもとで生産力が發展し商品經濟が進展するに伴つて、純粹封建體制は危機に瀕した。その危機とはいかなるものであるか？ ウィリアム・スタッフフォードは『現今における種々のわが國人のあつた種の一般的不平に關する簡單な調査』（一五八一年）のうちに云わさせている——騎士「まづ第一に、貴方のお考へで何らの損失を蒙らない人といふのは？」ドクトル「それは賣買で生活してゐる總べての人々だと私は思ふ、といふのは、彼等は高く買つても、その後では賣るのだから。」——騎士「その際、貴方の云はれるやうに利益を得る第二の種類の人々は誰ですか？」ドクトル「さうだ、舊來の地代で借地農場を自分で加工（すなはち耕作）する總べての人々だ、といふわけは、彼等は舊來の率で支拂ひ新しい率で賣るのだから、——すなはち、自分等

の借地に對して安く支拂ひ、その土地から生ずる一切の物を高く賣るのだから……」——騎士「ではその際、貴方は云はれるやうに自分で得た利益よりもより大きな損をするのは、どんな種類の人々ですか？」ドクトル「それは、すべての貴族、ジェントルマン、その他、限られた地代なり給料なりで生活してゐて、自分の土地を自ら加工（耕作）したり、自ら賣買に従事したりしないところの、すべての人々である」（資本論長谷部譯④三六五—三六六頁）。ウィリアム・スタッフフォードは、商品經濟の發展に伴う隸農層の上昇と封建貴族の財政的危機との對蹠的關係を見事にえがき出しているが、ここで云う隸農層の上昇についてマルクスは述べている——「イングランドでは農奴制が十四世紀の終頃に事實上消滅した。人口の老大な多數は、當時においては、また十五世紀においては更らにより多く、自由で自營の農民たち——彼等の所有が如何なる封建的看板によつて隠蔽されてゐようとも——から成立つてゐた。比較的大きな莊園では、以前には自らが農奴であつた莊宰が自由な借地農業者によつて驅逐された。農業上の賃労働者は、一部分は、自分の暇の時間を大土地所有者のもとでの労働によつて利用せる農民から、また一部分は、相對的にも絶對的にも數の少い自立的な本來的賃労働者階級から、成立つてゐた。後者もまた事實的には同時に自營農民であつた」（前掲書三〇—三一頁）。ウィリアム・スタッフフォードが領主的危機に對蹠せしめた隸農層の上昇とは、それ自身の内部に「胎芽的利潤」を内包した隸農層——「自由で自營の農民たち」——「人民的富」（前掲書三二—三三頁）——従つてそれは自由な借地農業者對農業労働者への隸農層の資本制的分化（イギリス型）または寄生地主對小作人への隸農層の寄生地主制的分化（日本型）の萌芽を内包している——の成立を意味しているが、それは同時に獨立小工業商品生産者——小營業者——小工業ブルジュア（初期マニユファクチュアを頂點とする）——富農または寄生地主對半プロレタリア——貧農または小作人への分化を内包している——

の成立を意成している。領主層または諸侯は、「人民的富」の發展に對抗して領主的危機を克服するためには、徳川幕府の享保寛政天保の三大改革のような租法復歸では間に合わない。領主層または諸侯は、たとへば十五世紀半以降に見られるような第一次圍込運動や初期獨占―封建的諸階級そのもの、ブルジュニア化―を遂行せざるを得なくなる。かくしてブルジュニア的發展を志向する二つの形態の富―封建的諸制限を突破して進もうとする「人民的富」と封建的諸特權をできるだけ維持しながら時流に投じてブルジュニア化しようとする封建的富、この間の生死のたゝかいははじまる。

然し純粹封建體制への「封建反動」的復歸政策は農民―「人民的富」のブルジュニア革命運動を鎮めることができな^{〔一〕}き。封建制度は再び編成替を餘儀なくされた。編成替以外にこの危機を克服する手は残されていない。〔一〕下部構造―封建貴族の「商人化」。純粹封建體制は生産物地代または貨幣地代による封建貴族の隸農に對する直接的搾取關係を原型とするが、商品經濟による「胎芽的利潤」の成立はこの直接的搾取關係を分解せしめて、封建貴族の搾取を漸次富農對貧農の資本制的搾取關係（イギリス型）または寄生地主對小作人の寄生地主的搾取關係（日本型）のいわば農民的搾取關係に依存しその派生物たらしめてゆくが、それは同時に二つのことを意味している筈である―封建貴族の搾取が新しい農民的搾取關係に依存しはじめることは、第一に封建貴族の隸農に對する經濟外強制が個々の特定の隸農から離れて新しい農民的搾取關係一般の強制的維持の方向に移行し、從つて第二に隸農における勞働と生産手段との自然的結合が、資本制的分化か寄生地主制的分化かの區別はあるにしろ、分解することを意味している筈である。封建貴族が「人民的富」―農民的搾取關係の萌芽に對應し「領主的危機」を效果的に克服してゆく道は、一方では「祖法」を棄ててかかる農民的搾取關係を前提しつつ自己の搾取

を強化し、他方では封建領主自らが益々「商人化」することであり、いわば農民の經濟自由主義を實質的に抑壓・否定することである。イギリスにおける富農團込——「獨立生産者」に對立する第一次團込運動——領主の牧羊資本家化（ユニケル化の一形態）——初期獨占における廷臣資本家（拙著『西洋經濟史』）、徳川末期における封建諸侯とくに西南雄藩における専賣——マニユファクチュアおよび工場はその古典的事例であるが、資本制的發展における封建貴族と農民とのこの對抗はマニユファクチュア時代になつて爆發する。レーニンはこの對抗を農業資本主義における「プロシヤ型の道」と「アメリカ型の道」との對抗として定式化し、それをブルジュア革命の實踐と結合した（レーニン『ロシアにおける資本主義の發展』とくにその「第二版への序言・『十九世紀末のロシアの農業問題』・一九〇五——一九〇七年のロシア第一革命における社會民主黨の農業綱領」など。封建貴族とブルジュアジーとを中和することとでなく、資本制化における兩階級の對抗を指摘すること——これがマルクス——レーニンの方法である。（二）上部構造——絶對主義。純粹封建體制における危機は資本制化における封建貴族または封建諸侯と農民との階級闘争であり、これこそ基本的對立である。そこに起る政治過程は、この農民のブルジュア革命的攻撃に對處して封建貴族または封建諸侯が整える支配體制の再編成である。農民の攻撃を前にして封建貴族または封建諸侯が自らを維持する道は、自己の封建權力を絶對者に吸収強化して、自らはその絶對權力の分身となることであり、イギリスの領主がチュエーダー絶對王政の治安判事となり、わが國の封建貴族が天皇制絶對王政の藩屏——官僚となることであり、約言して絶對主義を成立せしめることである（この立場は羽仁五郎『幕末に於ける社會經濟状態、階級關係及び階級闘争』・『幕末に於ける政治的支配形態』から、遠山茂樹『江戸時代後期——探覺書』——歴史學研究一二七號・『百姓——探の革命性について』——評論昭和二十三年四月號に至る）。ところで、この過程は、必然的に封建的支配階級内部の政治的攪亂——

封建貴族からの政權收奪および絶対君主への政權爭奪——を伴い、往々それが農民叛亂と結合しておられる（ジャック・ケイドの叛亂・「恩寵の順禮」叛亂・生野の亂など）。そしてこれまでの多くの歴史家はこの政權爭奪戦を絕對主義形成の基本的契機と考えて、その合理的解釋に専心してきた——たとえば佐幕派東北諸藩と討幕派西南雄藩との政權爭奪を封建的諸階級と中農＝國民的ブルジュアジーとの階級鬭争の反映とみ、かくて討幕派西南雄藩の創立した維新政權を何らかブルジュア階級的なものと錯覺する服部＝奈良本説はその標本である。だが、それは農民のブルジュア革命運動に對蹙する封建的政治體制編成替に必然的に伴う隨伴現象であり、それゆえにまたイギリスのチューダー王朝や維新政權の成立に見られるように妥協に終ることとなるのである。この政治的動亂においてブルジュア階級を代表する諸侯がイニツシャティブをとり絕對主義が何らかブルジュア階級を代表すると見る見解は、純粹封建體制の矛盾＝危機を理解していかないばかりでなく、「人民的富」に對立する封建支配階級の「商人化」を「人民的富」と錯覺しているのである。封建支配階級は人民の成長に對抗してゆぐためには、次第に衣をかえねばならないが、衣をかえ得たものだけが支配權を握ることができる。

註二 ここで二つの點について註記して置くこととする。

〔一〕絕對主義の經濟段階。絕對主義の形成を本來的マニユファクチュア時代から説明する見解は服部氏の『幕末敵マニユ時代説』以來わが學界の主流となり、いまも奈良本氏の『郷土＝中農論』や藤田五郎氏の『豪農マニユファクチュア論』（『維新前の段階について』『歴史學研究第一四八號』）という形で再生産されている。だが、わたしが屢々批判してきたように、『幕末敵マニユ時代説』は史實的にも維持されがたいばかりでなく、そもそも本來的マニユファクチュア時代なるものがブルジュア革命達成の條件たるブルジュア階級結成の時期たる限り、そこから當然絕對主義＝なしくずしのブルジュア革命論へと導くこととなる（拙著『封建社會の資本の存在形態』第二章『日本のマニユファクチュア問題』第一・二章）。そこで、最近になつて『幕末敵マニユ時代説』にか

わつて、『本來的ならざるマニユファクチュア時代説』が流行しはじめた(矢木明夫『幕末維新の經濟段階について』—歴史學研究一四八號。白杉庄一郎『絶對主義論批判』附論)。だが「本來的ならざるマニユファクチュア時代」なる概念は存在しうるのだろうか? わたしは曾つて、マルクスが『資本論』第一卷・第十二章『分業とマニユファクチュア』の冒頭にかかげた「本來的マニユファクチュア時代」なる概念をレーニンの「資本家的マニユファクチュア時代」と等置したことがあるが(『封建社會における資本の存在形態』三〇頁・『日本のマニユファクチュア問題』二八頁)、これは正當ではない。『資本論』の章別編成から見ても、「本來的マニユファクチュア時代」とは、第十一章「協業」における初期マニユファクチュアと區別して、分業に立脚するマニユファクチュアが資本制生産の支配的形態をなす時代であると理解すべきであり、従つて「本來的ならざるマニユファクチュア時代」とは「初期マニユファクチュア時代」と云ふことになるが、マルクスによれば「初期マニユファクチュア時代」なるものは存在しない(『資本論』長谷部譯③四八頁)。白杉氏のように、「初期マニユファクチュア段階」(前掲書一五六頁)と云つたり、「本來的マニユファクチュア時代」の「本來的」を「時代」にかけて本來的ならざるマニユファクチュア時代」を設定する人々を、われわれは何と考へをらいいであるか?

然し「本來的ならざるマニユファクチュア時代」や「初期マニユファクチュア時代」なる概念が存在しないとすれば、初期マニユファクチュアをうみだすような基盤は何であるか? わたしは、マルクスの「人民的富」(『資本論』長谷部譯④三一二頁)であり、レーニンは「人民的富」の工業的側面をとらえて「小營業段階」と規定した、と考へてきた。小營業を資本主義でないと強辯する大島氏や白杉氏は(前掲書一五六—一五七頁)、レーニンがそれを「工業における資本主義的發展」の第一段階に置いた所以を考へるべきである(『ロシアにおける資本主義的發展』岩波文庫版下二七八頁)。「胎芽的利潤」を孕む經濟は同時に(資本制)利潤を内包する經濟である筈ではないか?

〔二〕農民的土地所有。既に述べたように、純粹封建體制のもとで商品經濟が發展して隷農經營のうち「胎芽的利潤」が成立してくるに従つて、「胎芽的利潤」を起動力として隷農は分化する。その隷農分化の方向には、資本家的小作人⇨農業労働者の方向と寄生地主⇨小作人の方向とがあり、「胎芽的利潤」は前者では利潤、後者では地主得分に轉化するが、いずれも純粹封建的搾取關係と異り、それと對立する農民的(市民的と云つてもよい)搾取關係であり、純粹封建的土地所有に對立する農民的土地所有である。この點、わたしの理解は講座派の傳統と異る。

だが、それにもかかわらず、資本制的分化（イギリス型）と寄生地主制的分化（日本型）とは根本的に異なる。資本制的分化も寄生地主制的分化もともに、純粹封建體制下における封建經營の家族勞働力と土地所有との自然的に強制的結合の分解に農民からの土地收奪を前提している。従つて寄生地主制的分化は同時に工業ブルジュニアにプロレタリアの資本制的搾取關係を認察しうる土地所有形態であり、純粹封建的土地所有形態とは對立する。だが、然し資本制的分化では、分解した生産手段と勞働力とは資本に賃勞働關係として再結合され、農民からの土地收奪は原始蓄積として作用するのに対し、寄生地主制的分化では、分解した生産手段と勞働力とは小作經營のうちで自然的直接的に再び結合され、従つて農民からの土地收奪は農業部面では現實には原始蓄積として作用しないこととなる。

かくして、寄生地主的土地所有は資本制的土地所有とともに、純粹封建的土地所有の否定物であり、農民的土地所有でありながら根本的に異なる。寄生地主が幕藩體制に反對しながら、絕對主義と結合すると云ふ複雑な態度はここからまれる。

「人民的富」に小營業段階における封建貴族と人民との對立は本來的マニファクチュア段階になるとともに益々激化する。一五四九年のロバート・ケットの叛亂は領主圈込に反對する富農圈込の宣言であり、エリザベス朝にはじまる獨占論争は特權的マニファクチュア・特許貿易會社を樞軸とする初期獨占到反對するマニファクチュア・ブルジュニアに率いられた全人民の叫びの議會的表現である（拙著『西洋經濟史』二二二—二二三頁および四五頁）。本來的マニファクチュア時代とは、ブルジュニアがハッキリと階級的結成を達成する段階であり、絕對主義が危機に陥り爆破される段階である。しかも封建權力は今や絕對君主の一身に集中され、全人民の反封建闘争は今や絕對君主打倒へと集中され現實化され、しかも絕對主義打倒は封建權力一般の打倒となる。絕對主義は封建權力の凝集であり、それゆえにブルジュニア革命達成の條件を準備するものである。絕對主義が過渡期の權力形態たる所以は、それが半分封建的・半分ブルジュニア的な權力形態であるからでなく、それが封建權力の凝集であり反ブルジュニア階級的頂點であるがゆえにブルジュニア革命の條件を準備したからである。絕對主義は封

建社會のファッショニズムである。

ブルジュア革命の成巧は、資本主義が自立的に發展した國々では、マニユファクチュア時代に果される。後れた國々では、事態は異つた様相を示すであろうし、われわれはその複雑性のうちに論理を追求しなければならぬ。ここでのわたしの任務はいわば古典的論理の追求であつた。

三 絶對主義の階級構造

これまでの絶對主義論は多かれ少かれ「均衡理論」に災されていると、わたしは考へる。と云う意味は二つある。〔一〕これまでの絶對主義論は、封建社會のうちに資本制生産様式が發展し、封建貴族に對しブルジュアジーが成長するに従つて、封建貴族は漸次讓歩して一步一步ブルジュアジーを政治權力に参加させてゆき、矛盾は小刻みに解決されてゆく、と考へる。〔二〕そこから云う歸結が當然うまれてくる——絶對主義形成のための封建支配者内部の政權爭奪戰を何らが封建貴族とブルジュアジーとの階級闘争であるかのように錯覺する、たとへば西南諸藩と東北諸藩との對立やヨーク家とランカスター家との戰を封建貴族とブルジュアジーとの階級闘争と錯覺する。かくすることによつて、絶對主義を部分的にブルジュア政權化する(典型—根柢—余良本氏)。

だが、絶對主義論の悲劇と昏迷とはここから生ずる。これまでの絶對主義論は事實の論理を逆にしてゐる。〔一〕封建社會のうちに資本制生産様式が發展し、封建貴族に對するブルジュア革命運動が發展するに従つて、封建貴族はその「封建的危機」を克服するために、自ら經濟的に轉形するばかりでなく、その政治權力を集中してブルジュア革命運動に對抗する。「それは、ひとりびとりのユンカーの所領における封建的特權を廢止するが、し

かしそうするのはただそれを土地所有者全體の特權として全郡にわたつて復活させるためにすぎない。事態は依然としておなじであり、ただ封建的な方言からブルジュア的な方言に翻譯されただけのことである〔エンゲルス「ドイツ農民戰爭」第三版序文—マルクス・エンゲルス選集第十六卷上一五六頁〕。絶對主義は「ブルジュア的な方言に翻譯された」封建國家であり封建的矛盾の凝固した權力形態である。〔二〕だから、絶對主義形成期の政治的動亂においては、それがいかに分散的散發的であろうとも、農民層の封建支配者層に對する反封建闘争ブルジュア革命運動が基本であつて、封建支配者層内部における政權争奪戰——戊申戦争やバラ戦争は、それがいかに大がかりなものであろうとも、それは反封建闘争ブルジュア革命運動を抑壓し「封建的危機」を克服するための封建支配體制の編成替である。この點が明確に理解されねばならない。

註三 既に屢々言及したように、服部ニ奈良本氏は多分に「均衡理論」に災されており、勞農派的である。服部氏は、一方では自由民權運動を論ずる場合には、明治政權をこのブルジュア革命運動に對する抑壓體系として取扱ひながら、他方では維新動亂を論ずる際には遂に維新政權の主體をブルジュア化する。服部氏は二刀流の劍士であるように見える。

羽仁五郎氏や講座派の正流たとえば平野義太郎氏（『日本資本主義社會の機構』）はこの點で論理一貫している。羽仁氏は農民運動の質的發展を輕視する嫌いはあるが、封建諸侯と農民との闘争を基本的契機とし、封建的支配者層の内部闘争を副次的に考える（幕末に於ける社會經濟狀態、階級關係及び階級闘争）、『幕末に於ける政治的支配形態』。

わたしの『西洋經濟史』第九章『絶對王政の確立過程』は、封建的支配體制の再編成過程に力點を置きすぎ、基本的契機を過少評價する誤謬を犯している。ここに自己批判を要する。

かくして、われわれは絶對主義を過渡的な折衷的國家形態とし、そのための封建支配者層の争闘を本質的な階級闘争と見るような「均衡理論」の誤謬をあきらかにした。絶對主義は農民を中心とする反封建闘争ブルジュア革命運動に對抗する封建支配者層の權力形態であり、「ブルジュア的な方言に翻譯された」最後の封建國家であ

る。大島||白杉氏の反論にもかかわらず、絶對主義||封建國家説は絶對に正しい。然し讀者は尋ねるであらう——絶對主義の反ブルジュニア革命的性格はそれでわかつたが、封建支配者層内部の政權爭奪戦||封建的支配體制の編成替||絶對主義の階級構造はどうなるであらうか？

絶對主義は封建支配者層の権力形態であるが、然し封建支配者層とくに指導的支配者層は封建社會の段階の進展に伴つて異なる。かつてアンリー・ピレンヌは資本主義について云つてゐる——「わが經濟史をわかつ各時代はそれぞれ異なる特別の資本家階級をもつてゐる。換言すれば、特定の時代の資本家のグループはそれに先立つ時代の資本家グループからうまれたものではない」と (The Stage in the Social History of Capitalism—American Historical Review, XIX, p. 494)。封建社會の段階の進展に伴つて、封建貴族の性格も變質するし、その指導權も推移する。そのため、封建社會の各段階ごとに封建支配者内部に指導權の爭奪が起り、その爭奪を通じ封建權力は集中される。ところで、絶對主義形成期||純粹封建體制の危機に際し、絶對主義に協力し反對したのはいかなる階級であらうか？

「均衡理論」をつらぬこうとする人々——大島||白杉氏や河野氏や服部||奈良本氏によれば、絶對主義の階級的基礎は勢力均衡しつある封建貴族と商業資本を先頭とするマニユファクチュア・ブルジュニアジとである。そして白杉氏は、商業資本がマニユファクチュア・ブルジュニアジを代表とすると云う「發見」を鬼の首でもとつたように振り廻すが (白杉庄二郎『絶對主義論批判』各所)、それは「均衡理論」が最初から持つてゐる前提であつて、既に舊套に屬してゐる。服部氏を見よ。だが然し、封建貴族と商業資本とは中世封建社會の二大要素——農村と自治都市との支配者層であり、彼等が發展しゆく「人民的富」||彼等がこれまで支配しつすけてきた隸農・都市

住民のブルジュア革命運動にさらされたところに、純粹封建體制の危機がうまれたのであり、「均衡理論」のさきの命題はこの基本的對立を見逃している。「均衡理論」は、既に述べたように、この基本的對立をそれが規定する第二次的對立とすりかえようとしている。第二次的對立とは次の二つを意味している。絶對主義形成は封建領主と自治都市とに分散していた封建權力の剝奪集中であり、従つて第一にその過程において封建權力を剝奪・集中しようとする絶對君主とそれを剝奪される封建領主・商業高利貸資本（自治都市）とが對立し、第二に絶對君主はこの剝奪・集中を容易にするために封建的土地貴族と貨幣貴族とを相互にたたかわせながら利用する。これらので、とくに第二の副次的對立が「均衡理論」の論據になつてゐるが、然しこれらの對立は所詮封建的支配體制の内部對立であつて、かかる内部對立にもかかわらず封建的土地貴族や貨幣貴族をしてその權力を絶對君主に移讓することを強制するものは反封建闘争ブルジュア革命運動である（幕末については遠山茂樹『江戸時代後期一揆覺書』「歴史學研究」二七號三一—三二頁）。イギリスの例をあげよう。バラ戦争のはじまる直前一四五〇年に起つたジャック・ケイドの一揆では、農民の反封建闘争ブルジュア革命運動が封建領主の反絶對主義運動と結合してゐたが、第一次圍込運動を契機として農民の反封建闘争が封建領主から獨立化し純化した一五四九年のロバート・ケットの一揆を境として、絶對王政と封建領主とは完全に妥協した（拙著『西洋經濟史』一一八一—一二三頁）。かくして絶對主義の確立過程は封建貴族や前期的資本が絶對王政をパトロンのとしてその主權に絶對服従する過程である。封建貴族や前期的資本は絶對主義の庇護のもとに、「人民的富」の「資本家的富」への發展に對抗して自らを資本家に轉化させようとする。問題は白杉氏が夢想するほど單純ではない。

わたしは、絶對主義がパトロン—妾の關係において封建的土地貴族と貨幣貴族とを階級的基礎とする、と云つ

た。土地貴族や貨幣貴族は今や自ら占有する公權力のゆえではなく絶對主義の分枝として反射として公權力の保護をうける。云つて見れば、彼等は氏を返上して財富を守ろうとする。絶對主義の階級的基礎となつた封建貴族や貨幣貴族は多分に氏素姓 \parallel 身分を失つた生産形態の素面の代表者——ブルジュア革命運動に對抗する生産形態の反革命的な代表者であり、絶對主義は多分に氏素姓でなく、かかる生産形態こそ保護しなければならない。そこで、絶對主義は、一方ではかかる反革命的な身分を氏なき素町人や百姓に開放し、他方では純粹封建體制に對抗して起つてきた農民的（市民的と云つてもよい）搾取關係——寄生地主的土地所有でも、これもブルジュア革命運動に立ち向かわせうる限り、これを保護し味方とする。絶對主義はもとのままの封建貴族や貨幣貴族を階級的基礎としたのでなくて、「町人化」 \parallel 資本家化しようとする封建貴族・貨幣貴族と「貴族化」しようとする農民的搾取者とを階級的基礎とする。「人民的富」とその資本家的富への發展に應じて、封建性そのものも變化する。絶對主義の形成過程は封建性の改鑄過程である。寄生地主の動きを見よ。

絶對主義は、一般に封建權力の推轉は、人民の、成長してゆく人民の前進に對抗してゆく封建支配者層の抑壓體系であり、抑壓強化體系である。これまでの「均衡理論」的絶對主義論は封建支配者層内部の政權争奪戦——これまでの政治史の中心課題である——に眼を奪われ、前進する人民の姿を往々忘れた。わざと忘れた人々は「均衡理論」を純粹化し、それを忘れられない人々は「それでも矢張り」と苦惱する。學問は怖いものである。それは全く人間の鏡のようなあらわれである。

追記一 わたしは本稿脱稿後に河野健二氏『絶対主義下の階級経済關係』（歴史學研究一四九號）と藤田五郎氏『明治維新史分の析視角』（史學研究第四集）とを讀む機會を持つた。そしてわたしは今までの形態の論争がもはや無意味な論争であること、新しい論理的方法的前進と史料の裏付けとが今こそ必要になつたことを痛感した。わたしはそれを意識しつつ本稿を書いた積りである。わたしは本稿が同時に河野氏や藤田氏への答辯にもなつてゐると考へてゐる。なほ原口清氏『幕末政争の一考察』（歴史學研究一九四九年十二月號）、『明治維新の道』（歴史評論一九五〇年三月號）、遠山茂樹氏『明治維新』および井上幸治『秩父事件』（歴史評論前掲號）は幕末維新の階級構成とそこからくる政治的動向との新しい分析方向を暗示してゐる——一九五一年四月十五日記。

追記二 本稿は昭和二十五年度文部省科學研究費の援助をうけて着手中の共同研究『イギリス資本主義の成立と古典經濟學』における私の擔當方の方法的序説である。